

## 12 高次脳機能障害患者の介護者が抱く退院時の不安・困り事

病院 看護部 3階病棟 池田亜沙美 中嶋直美

### 【はじめに】

A病院のB病棟に入院している患者の多くは、脳血管障害や頭部外傷により後遺症が残り、麻痺や高次脳機能障害などの改善に向けて入院生活を送っている。入院時に患者・介護者に「医療・看護職への希望・苦痛や不安なこと」を直接記載して頂いているが、過去6カ月の記載内容を集計した結果、退院後の生活に対しての記載は少なく、身体面、認知面、日常生活動作面など症状として目に見えている内容の記載が多かった。しかし、退院日が決定すると家族より在宅での生活の困り事や退院後の復職や将来についての不安の訴えが多くなる。介護者の訴えを不安・困り事と称し、アンケート調査を行い、高次脳機能障害者の退院指導に役立てたいと考えた。

### 【研究方法】

平成21年8月から11月までに高次脳機能障害と診断された患者の介護者25名(表1)を対象に紙面によるアンケート調査を行った。

### 【結果と考察】

1. 身体面について不安・困り事を感じている介護者が最も多い結果となった。(図1)「緊急時の対応」「合併症」「病気の再発・悪化」について不安・困り事を感じているのは、頭部外傷などによる痙攣、脳梗塞や脳出血など、再発した場合にどのように対応してよいか分からないためと推測される。不安・困り事を軽減する為には入院中から痙攣を起こさないための内服指導や生活指導、痙攣を起こした場合の対処方法の指導と退院後の通院先などを整える必要がある。

2. 高次脳機能障害の症状面については「記憶の低下」「問題を解決する能力」「1日の過ごし方」に不安・困り事を多く感じている結果となった。(図2)入院中の諸症状に対し、自発的に行動し管理できるようスケジュール表やメモリーノートなどの補償手段を活用し生活の構築ができるように、患者や家族に関する事が重要である。

3. 日常生活動作(以下ADL)についての不安・困り事は他の項目と比べると少ない結果となった。(図3)ADLの不安が退院近くなると減少しているのは、医療スタッフの介入により自立部分が増えた結果と考えられる。

4. 手段的日常動作(IADL)の中では「家庭内での役割」が一番不安・困り事を感じている項目であった。患者の状況にあった役割行動の変化を把握し、介護者の不安の軽減が図れるようにしていく必要がある。(図4)

5. 社会生活面では「サポート体制」に不安・困り事を感じている介護者は96%と多かった。(図5)デイサービスなどの福祉施設を利用するのもサポート体制の一つだが、介護者以外の支援者がいることが望ましい。退院前に介護者以外にサポートを受けることのできる施設を探すなど支援していくことが重要であると考え。今回の調査では患者の受傷年齢が40～50歳代を占め、復職についての不安は88%と多く、それが経済的な不安・困り事につながっ

ていると考えられる。私たちが退院間近の患者や介護者から復職や復学のことについての不安を最もよく聞くことから、調査と一致する結果となった。退院後も外来で復職・復学の可能性について継続的な支援を行なう必要がある。

表 1 対象の属性

		N=25	
		男性	女性
年齢	20代	0	1
	30代	0	0
	40代	2	2
	50代	3	8
	60代	2	4
	70代	2	1
	続柄	配偶者	5
	親	3	7
	兄弟	1	0

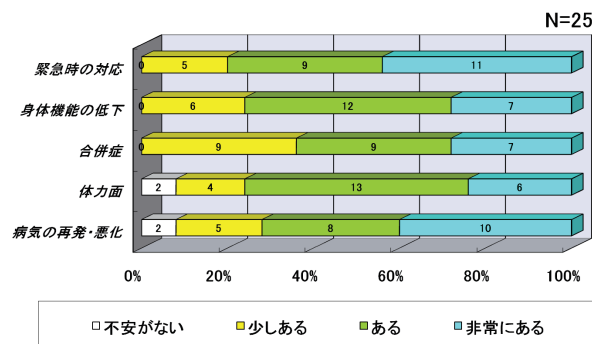


図 1 身体面の不安・困り事の割合

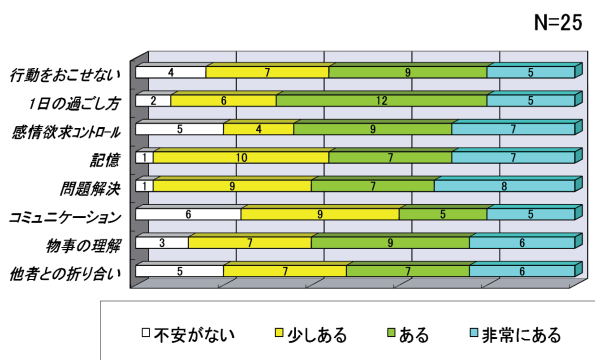


図 2 高次脳機能障害症状の不安・困り事の割合

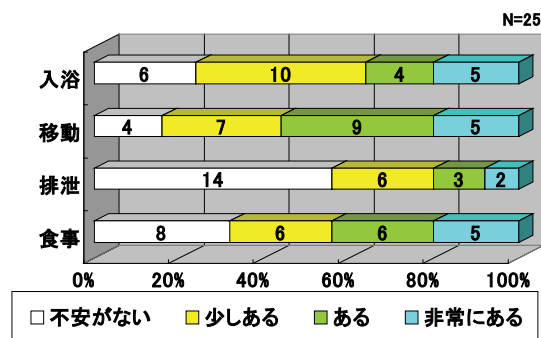


図 3 ADLの不安・困り事の割合

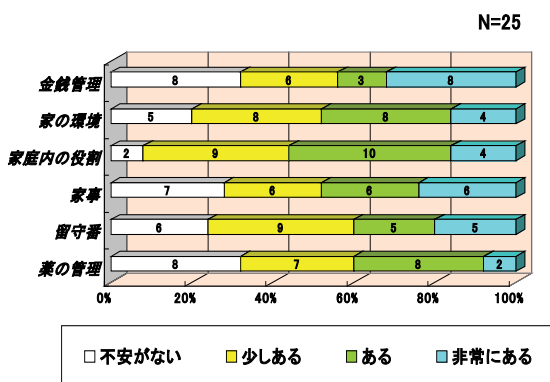


図 4 IADLの不安・困り事の割合

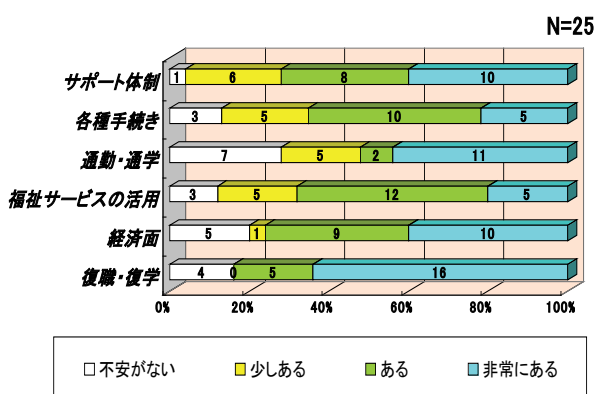


図 5 社会面の不安・困り事の割合